

和紙 だより

■修復用和紙供給事情 —株式会社マシミ—

一通りの素材・道具が揃う店内の様子



(株)マシミは表装、内装、澳材料等の卸・小売や仕立てを基軸に、修復用和紙や表具基礎財を大英博物館、ルーブル、ボストン、メトロポリタン美術館など、海外の名だたる美術館に供給している会社でもある。社長の横尾靖さんは、大手電機メーカーの海外駐在員としてアフリカ・ケニヤを始め東南部アフリカ諸国で辣腕を振るい、十三年間勤務の後、岳父の事業を引き継いだ。東京、大塚駅から歩いて五分ほどの本社ギャラリーでお話を伺う。

●表装文化を絶やさず

戦後間もない一九四五年、マシミの前身「平和木工」は、和歌山市で澳製造業として創業され、六二年には現在の場所、豊島区巢鴨に東京工場を設立。茨城にも工場を作り、和歌山・東京・茨城の三ヶ所を拠点に、澳の製造では一時期日本一に近い取引額を誇った。澳の需要減少を機に、先代は澳・内装・表装をバランス良く発展させようと奮闘。一九九二年、一次たまたまとしていた店を横尾氏が引き継いだ。二五〇〇年もの間、継承されてきた日本の表装文化を絶やしたくなかったからだ。雨来、従来の事業を中心に据えつつ、販路を海外に向けた表

装・修復材料の輸出、又日本伝統文化の体験教室、ギャラリーの企画運営など、業務を「文化文芸」にする体制を整えてきた。

当初は海外に取引先もなく、とにかく一度ヨーロッパに行ってみようと、和紙のサンプル帳だけを携え、イギリス、フランス、オランダ、ドイツなどを回った。折しもロンドンでIPC（国際紙会議）が開催され、業者の展示即売会に誘われた横尾さんは、和紙、糊、刷毛、道具などを携って実演販売したところ、ブリスには人だかりができた。欧米の美術館には、日本で修復技術をきちんと学び、本国で教える人も多いが、彼らは口々にこういったものが買えないと訴えるのを聞き、確かな手応えを掴んだ。

●信頼関係が第一

早速、海外用に科学的データを記した和紙見本帳を作ろうとしたが、当初は満き元も情報を出さず、産地に再三出かけて行つては、正確な情報を正直に伝えてもらわなければ売れないと説得。PHなどは社長自ら測った。改訂を重ねた最新の和紙見本帳には、産地、原料、重量、染料製造工程（手漉き・機械抄、煮熱剤、乾燥剤）、サイズ、PH、主たる用途など、使い手の知りたい情報が一枚一枚に丁寧に整理、印刷されている。美術館への納品はほとんどが直接取引。澳を製造していたので、木、布、紙の加工



技術に強い上、職人のネットワークもあるので、品物の仕立も可能だ。

「うちは和紙が主体ですが、軸に使う裂地、桐箱、刷毛や糊、書籍まで在庫していて一通り揃うので、美術館関係者から口コミで広がり、海外のお客様も京都まで行く手間が省けるとよく寄って下さいます。ただし、大事なことはうちがその時なくても、相談に乗り、真摯に対応してあげることです。だって、彼らは日本の文化財に敬意を払い、修理して守ってくれて、世界に広めてくれている専門家なので、感謝して、将来とも繋がる信頼関係を育まないといけません。」

ネットでの問い合わせも多い。昨年オランダで修復中の掛け軸の組紐の相談を受け、一般品の国産正絹のみを使う東京豊島区のお餅組紐屋さんを探し出し、やりとりをしながら品物を納品した。担当修復家は感動して、日本にまでお礼に訪れ、横尾さんは彼を組紐工房にも案内した。

●和紙だけでは伝わりにくい

一番の問題点は、現在のいい紙を作ることでできる人が限られており、注文がそこに集中し、半年先一年先でない納品できないケースが多いことだ。一方美術館側も年間予算は限られている上、絵画の購入や施設整備に回されことも多い。加えて一枚の和紙がどうしてこんなに高いのか、何故そんなに待たされるのか、日本の和紙事情を十分理解している人は少ない。「たまたま手に入ればラッキー!」では、本当は商売になりません。その辺を海外の美術館にも理解して頂かないといけません。紙だけ持つて行って素晴らしいと言つても、専門家は

いざ知らず、一般の人は理解できません。だから日本の文化を総合的に見せて、その中で紙がどれだけ大事か、という風にと持っていきたい。

このような意識から、マシミでは、生活に生かす表装技術、和紙日本、金銀箔、書道、水墨画、陶器などを学ぶ、和の文化教室「マシミ道場」を一九九五年から始め、軌道に乗せた。また、有形無形の日本の豊かな文化遺産の研究と保存継承を目的に、講座や講演会、コンサート、海外文化交流を行う「一般社団法人ゆらび」という会も運営している。



マシミ道場にて表具作りを学ぶ受講生

「例えば私が提案した和紙の折畳み茶室屏風ですが、ここに入つてもらつて、これ全部紙なんですと伝え、モデル的な掛け軸を見て頂いて、紙の素晴らしさを体験的に見せる。一般の人に広めるプレゼンテーションの努力がもっと必要です。」



「ゆらび」の活動拠点、豊島区山崎の日本文化会館イースト (2012年) ミラノ/パヴェリアンセンターに出品した茶室屏風 (2015年)